

浅川澄彦博士を偲んで

森 徳 典

去年10月19日に、浅川先生がお亡くなりになったことを、奥様からの喪中がきで知りました。先生は、本誌の前身「熱帯林業」新シリーズの立ち上げ及びその後16年間の長きにわたり編集委員長を務め、本誌発展の基礎を築かれました。また、国際緑化推進センターの発展のために、センターの創設以来長年にわたり、ご尽力いただいた方であります。ここに先生のご逝去をお悔やみ申し上げ、心から先生のご冥福をお祈りいたします。

先生は、昭和2年10月10日にお生まれになり、東京大学農学部林学科を昭和26年の卒業後、直ちに林野庁林業試験場造林部に就職され、研究者としての道を選ばれました。浅川先生が国際的な視野を広げられたのは、昭和32年から1年間アメリカ留学をされ、林木種子の発芽生理の研究を通して海外の研究者と親交を深められたことにあると思います。先生の卓越した種子研究が国際的にも認められ、昭和47年に国際林業研究機関連合（IUFRO）の種子研究分野の国際研究集会の日本で開催をお引き受けになりました。その当時、林学分野では、日本で林業研究の国際会議を行うのは、非常に希でしたが、浅川先生の事務能力のすばらしさと国際的にも知られている研究者と言うこともあって、会議はスムーズに進行し、日本における研究の実力を示すことが出来ました。

浅川先生が熱帯林関係の仕事に本格的に関わられたのは、日本の熱帯林再生事業の開始直後のフィリピン国パンタバンガンにおけるJICAの造林事業プロジェクトであります。その事前調査では、調査団のボートがパンタバンガン・ダム湖で沈没し、機材一切を失われたという話で、当時は有名な挿話でした。その後同プロジェクトのリーダーとして、3年間赴任されました。熱帯林再生プロジェクトの第1号の運営ということで、ご苦労も多かったと思います。その当時のことが、雑誌「熱帯林業」にパンタバンガンの思い出をお書きになっています。その中に、植栽開始を記念した植樹祭が昭和52年7月23日に、日本大使、フィリピン天然資源省大臣参列のもとに、行われたことを感無量であったと書かれています。

昭和62年に、玉川大学農学部教授に転出され、大学での人材養成に関わられると同時に、平成4年から11年までJICAの海外青年協力隊技術顧問を務められ、途上国での林業支援活動に携わる若い隊員の教育もされました。大学退職後の平成5年から12年まで国際緑化推進センターでの熱帯林の調査、広報、人材育成などの各種委員会委員として活躍されました。国際緑化推進センターで特に力を入れられたのが、熱帯林に関する情報を広めることと熱帯林の重要性の啓発です。同センターの熱帯林造成技術テキスト全12巻は、NGO等民間植林担当者からいまだに好評を得ております。

昭和41年に熱帯林業協会から発刊された「熱帯林業」は熱帯関連の情報誌として知られていました。しかし、「熱帯林業」を発行していた熱帯林業協会が、熱帯材の輸入減少などによって、昭和59年3月に解散することになり、この雑誌は一時、廃刊の憂き目に会いました。当時、林業試験場の造林部長であった浅川先生が新しい「熱帯林業」を作るために、奔走され、前誌が廃刊したのと同じ年の10月には、新しい「熱帯林業」が発刊されました。ほとんど休刊なしに、新しいシリーズを発刊されたのには、関係者みんなが驚いたものでした。「熱帯林業」は71号から雑誌のタイトルが現在の「海外の森林と林業」となりましたが、依然として、日本で唯一の熱帯林を中心とした途上国の森林・林業関連の雑誌として、発行され続け、現在80号に至っています。浅川先生は、この新シリーズの1号から48号（昭和59年から平成12年）まで、16年間にわたって編集委員長として、この雑誌を編集されました。そして、国際緑化推進センターを退職されたのが、平成12年でした。旧「熱帯林業」の後継誌が紆余曲折しながら、今日まで発行が継続されているのは、浅川先生のご努力によるところが大きいのです。

国際緑化推進センターを辞任後しばらくして体調を崩され、長期の療養生活を続けておられました。まだ、お会いする機会があるものと思っていましたが、訃報に接し、誠に残念でなりません。どうぞ、安らかにお休みください。